

# 公開授業「体育（理論）“「コツ」を考えよう”」（補足）

古 山 泉

## はじめに

165頁所収の授業報告はスペースの制限があったため、一見風変わりな授業の意図を十分に示すことができなかった。本来は活動現場で行われるべきコツ情報の遣り取りを教室で行った背景等について補足したい。

我々は様々な場面において「コツ」という言葉を使う。「コツ」に関する詳細な研究（金子明友「ワザの伝承」）もあるが、平易に“身体運動についてのある目的を解決するための方法”としてこの小論を進めることにする。

## 1. コツの交信のために

“歩く”という日常的な動作一つとっても、‘速く歩く’、‘優雅に歩く’、‘静かに歩く’、‘重量物を持ってバランスを崩さずに歩く’等々、目的が意識されるとそれに応じた歩き方の変化が現れ、目的に応じてコツを使い分けていることがわかる。しかし、それは殆ど意識されない状態で遂行されるのが一般であろう。

授業や部活における生徒の動き方を観察すると、動きの良し悪しのみならず、その日の気分、課題の理解度、自分なりのコツを掴んでいるか等々多くの要素が見て取れる。

ある種目については十年選手に近い生徒もいれば全くの初心者もいて能力差が大きいのは当然であるが、コツ情報を他者の運動感覚に翻訳可能な言葉で表現するのは容易なことではなく、“上手＝高次かつ多、下手＝低次かつ少”という単純な比例関係にはなっていない。

上手な生徒にコツについて尋ねると、明確な言葉で表せる者、曖昧ながら自分なりのコツを掴んでいると思われる者、言葉では表せない者と様々である。上手くできない生徒でも、探っているコツらしきものを的確に言い表したり、何ができないで困っているかを正確に言える者がいたりする。したがって、“上手・下手”と“知っている・知らない”という単純な図式を当てはめて生徒の動きを見る訳にはゆかない。

コツについて生徒に尋ねたとき答えが返ってこない場合が多いが、本人が臆気を感じている「コツらしきもの」を肯定的に捉えていないことも考えられる。つまり自分の感覚を自分にとって正しいものと

して受け入れていないのである。コツ情報を披露させることは、上手下手に拘わらず、まず自分の持っている「コツらしきもの」を自分の言葉として肯定的に認めさせる必要がある。本来、コツについての交信は目的となる身体運動が展開する現場で行われるもので、それも時間差がない方が良い。それを教室に持ち込んだのは、教師1人対生徒40人（2年蘭組は36人）という授業形態では個々の生徒との交信が不可能だからである。さらに、文字通り“全員の”コツ情報を俎上に上げて、その言葉を皆で確認し合うことを実現する環境が必要だったからである。

生徒達は、昔のようにガキ大将が率いる異年齢集団の中で様々な知恵を年長者から教わり、それを年下の者に伝えるといった経験を持っていない。何がコツであるかもわからないし、どう言えば他者に伝えられるかもわからないと思われる。KJ法（川喜田二郎「発想法」）を参考に、まず一人ひとりの「コツと思えるもの」を全員で見られるようにし、同じようなことを考えている者の存在を認めさせるステップが必要だった。同類項の存在が、自分の感覚を肯定することにつながる。授業前半で視聴させた担任教官（音楽）のテニスのサーブ、同級生であるバスケットボール部員のドリブル、バレーボール部員のパス、家庭科教官の包丁捌き、同級生のバランスボードといったVTR映像と各々の言葉も、「自分なりの言葉」を肯定させる一助となった筈である。

## 2. 出されたコツ情報

この授業の前には、2～3時間ほどキャッチボール（投球&捕球）の授業を行っており、多くの生徒が初心者レベルであった。テーマであるソフトボールの遠投についての現場感覚を思い起こさせるために、土方教官の投球映像を視聴させた後、自分なりの感覚を言葉にさせた。擬音語や図解も奨励した。4人を一グループにしたのは、黒板に掲示できる紙数と、後部座席の生徒も含めて全員が見られる文字の大きさとの関係から考えた方法である。本来ならクラス全員の情報を個々に掲示したかったので、名前ではなく投球能力（自己申告）を記入することでそれを実現した。各グループから出されたコツ情報は下表にまとめた。文字の表記は生徒から提出されたままのものである。

各項目後の10～40の数字は提案者の投球見込み能力（自己申告）であるから、例えばグループ2の「B. 全身を使う」は提案した者が4人全員だったことが見て取れる。

グループ1	グループ2
A. 助走 20	A. 体をしならせる 10
B. 45°上向きを意識して弧を描く 20・20	B. 全身を使う 10・10・10・20
C. リズム 1. 2. 3! 20	C. 投げる前にいきおいをつける10
D. 重心移動後ろから前へ 20・25	D. 上向きに投げすぎない 20
E. 投げた後の腕を振りきる 20・25	E. 頭の中でイメージする 10
F. ひざを曲げる 20	
G. 投げる手と反対側の足を前へ 20・20・25	

グループ3	グループ4
A. 腕を大きく動かす 10・20・20 B. 全身を使う 10・10・20・20 C. ボールを押し出す 10・20・20 D. 上を狙いすぎない 10・10・20・20	A. 足前後 10・20・20 B. 体をバネのように使う 10・10・20・20 C. ステップ 20 D. 腕を力強くふる 10・20 E. 速いボールを投げるイメージ 10・20
グループ5	グループ6
A. 念じる 10 B. 腕を後ろに引いてから投げる 10 C. 体をそらす 10・20 D. ためてから一気に投げる 10 E. 押し出すように投げる 20 F. 軽くにぎって投げる時に力を入れる 20 G. 上向きに投げる 20 H. 重心の移動に気を付ける 10・20 (右から左へ→右ききの人は)	A. 力を入れる(場合によっては高く) 40 B. 頭のうしろからグイーン 40 C. 足・腰・肩・肘・手首の順にひねって力を伝える 40 D. 体全体で振りきりつつ、重心を前足へ 25 E. 助走をつける 10 F. 体を回転させて(同時にステップ)嫌いなものの顔面を射抜くようにダウン!!な感じ→投げた後にスカッとくる 40 G. 振りかぶるように 40
グループ7	グループ8
A. 助走をつける 10・10・25・25 B. 体の重さをボールにあずける感じ 25・25 C. シュッと・グッと 10・10・25 D. 斜め上に押し出す感じ 10・25 E. ↑45°で 10 F. ひじで投げる 25 G. 体をひねる 10・10・25←遠心力 (!!) H. 体をひく 10 I. 腕を反る 10 J. 力む 10・10・25・25	A. 腕をそらす 20・20・30 B. ボールを投げ出すタイミング 20・20・30 C. 腕(上半身)全体で 20・20・30 D. 足(重心の移動) 20・20・30 E. 斜め45° 20 F. ボディーバランス 20
グループ9	
A. 体全体で、重心移動 10 B. 大きく振りかぶって、体ごと投げる 10 C. 斜め上の方向を見る 10・20 D. 助走をつける 10・20 E. ボールの気持ちになる 10	

## おわりに

授業を行った2年蘭組は、平素おとなしいと見られるクラスで、積極的な反応を予想していなかった。しかし、身近な人達のVTR映像と各のコツに関する言葉が功を奏したであろうか、自由に意見を出せる雰囲気ができ、肯定的に情報の交信が行えたことは成功だった。

今回の授業は、多くの者に共有できる「私たちのコツ」を探ることではなく、まず生徒一人ひとりの考えている私的なコツを生徒自身が肯定し、他者との交信の足場を作ることが目的だった。出された情報について厳密に見れば、「コツ情報」とは言い難いものもあったが、「まず出された全てを足し算で」扱うことで、私的なコツを肯定できたと思われる。

用意した3つのテーマのうち1つしか消化できなかったことは大きな反省点である。生徒達の反応が

良かったため、50分1コマの中には収まらなくなった。嬉しい悲鳴である。

平素の一切片として企画したが、やはり公開授業という特殊な状況設定になってしまったことは否めない。日常の中でこのような試みを企画するか考えると、単位数が減ることもあり、おそらくチャンスは作れないと思う。

この試み自体は有意義であり成功だったと思えるが、やはり実技現場では全員との交信は不可能であることには変わりがない。ただ、上手く水を差し向ければ、教師と生徒とのコツの交信が可能であろうし、生徒同士が教え合う、伝え合う関係も期待できる。それを当てにしてコツの遣り取りを楽しみたいものである。

## 参考文献

- ・金子 明友 「わざの伝承」 (明和出版)
- ・川喜田二郎 「発想法」 (中公新書)